

日本学士院ニュースレター

2013. 4 No. 11



客員スザンヌ・コリー博士を招へい(写真右端)

平成24年12月12日、日本学士院は、スザンヌ・コリー博士(ウォルター・イライザホール医学研究所教 授、オーストラリア科学アカデミー会長)を客員(Honorary Member)に選定しました。コリー博士は本院の 招きに応じて、本年3月16日より約10日間の日程で来日し、夫君アダムス博士とともに本院を表敬訪問され ました。コリー博士は免疫学や腫瘍学の分野で世界的な業績を挙げ、日本人研究者の育成にも多いに尽力されま した。コリー博士は初の女性客員です。(関連記事9ページ参照)

目次

平成25年度日本学士院賞2	『学問の山なみ』から一歴史をつくった会員一13
講演会レポート5	第58回公開講演会のお知らせ14
第9回日本学士院学術奨励賞6	会館施設の利用案内15
外国アカデミー等との交流8	投稿論文の募集15
第28回国際生物学賞授賞式8	寄附のご案内15
客員スザンヌ・コリー博士を招へい9	会員・客員の逝去16
新会員選定10	会員の近刊紹介16
学士院の歩み11	編集後記16
会員寄稿(竹下守夫会員)12	

平成25年度日本学士院賞

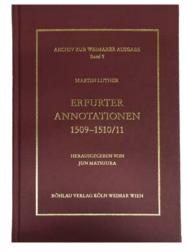
平成25年3月12日開催の第1067回総会において、日本学士院賞9件9名(うち2件2名には恩賜賞を重ねて授与)を決定しました。第103回となる授賞式は6月に挙行される予定です。

恩賜賞・日本学士院賞

Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509-1510/11 (『マルティン・ルター:エルフルト 期注記集 1509-1510/11』) 松浦 純 (まつうら じゅん) 東京大学大学院人文社会系研究科 教授



ルター最初期(アウグスティヌス会エルフルト修道院・ エルフルト大学神学部講師期、1509-11 年)現存全自 筆資料(古代教父の著作、中世神学書等への行間・欄外 注記、一部は自ら発見)の校訂・注解・解説により、ルター 研究の基礎を築き直し、国際的に高い評価を得た。



松浦氏の著書 Martin Luther: Erfurter Annotationen 1509-1510/11 (Köln/Weimar/Wien: Böhlau Verlag 2009)

恩賜賞・日本学士院賞 「強相関電子材料の物性研究」 十倉 好紀(とくら よしのり) 東京大学大学院工学系研究科教授、 理化学研究所基幹研究所グループ ディレクター、産業技術総合研究所



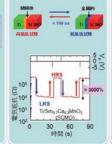
通常の物質では見られない性質を示す「強相関電子材料」という特殊な材料を見出し、量子物性科学を創成した。その開発原理は、基礎科学と産業応用への両面で多大な貢献をした。

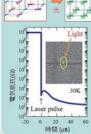
強相関電子が作る「相」を制御

磁場制御 電場制御 光制御 光制御 光制御 不揮発性抵抗変化メモリ 表で起こす金属化 電子液体 電子液体 電子液体 電子液体 100 ms (100 ms) (100

磁場だけでなくさまざまな刺激によって、電子状態を劇的に変化させることができる。

12 (Nd,Sm)₁₀Sr₁₀NlnO₃ E 08 #306 #504 #502 115K 125K 136K 0 0 5 1 15 2





日本学士院賞 「中国文学理論の研究」

フェロー

興膳 宏(こうぜん ひろし) 東方学会理事長、京都大学名誉教授 りゅうきょう 劉勰の『文心雕龍』、鍾嶸の『詩 品』の二つの作品を軸として、中国 の文学理論史について系統的に研究



し、少なからぬ創見を提示した。特に多くの著作を比較 して、その間の異同を見出す洞察にすぐれている。





興膳氏の著書『新版 中国の文学理論』(清文堂出版、 2008 年 11 月)、『中国文学理論の展開』(清文堂出 版、2008 年 3 月)

日本学士院賞

「還元系金属酵素活性中心の生物無 機化学に関する研究」

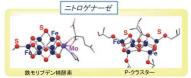
巽 和行 (たつみ かずゆき) 名古屋大学物質科学国際研究セン ター長・教授

ニトロゲナーゼやヒドロゲナーゼ

などの還元系金属酵素の活性中心に存在する複雑、かつ 不安定な様々な遷移金属硫黄クラスターのモデル錯体を 世界に先駆けて合成し、還元系金属酵素に凝縮された自 然の巧みな仕組みを解明する端緒を拓いた。



還元金属酵素のクラスター活性中心



空気中の窒素から窒素肥料の原料となるアンモニアを作る

巧みな酵素機能に学ぶ

- * 金属-硫黄クラスターの独自の合成法を開拓 特異な構造を持つクラスター活性部位の
- モデル化合物の化学合成を達成 * 電子特性や反応性を明らかにする
- * 還元系酵素の機能を化学的に解明する 学術基盤を確立





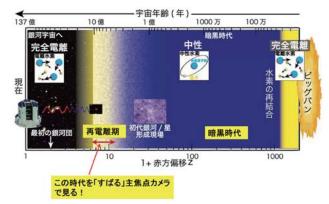
アセチルCoAを合成して 炭素サイクルの一翼を担う

日本学士院賞 「初期宇宙の研究」

家 正則(いえ まさのり) 自然科学研究機構国立天文台教授、 東京大学大学院理学系研究科教授、 総合研究大学院大学物理科学研究科 教授



「すばる」望遠鏡を駆使し、独自に開発した特殊フィ ルターを用いて、世界に先駆けて129億光年彼方まで の最遠銀河を次々発見し、暗黒宇宙時代の終わり即ち宇 宙再電離の完了時期をビッグバンからおよそ8~9億年 後と特定することに成功した。



日本学士院賞

「エルビウム光ファイバ増幅器の実 現とそれを用いた光通信の高度化に 関する貢献」

中沢 正隆(なかざわ まさたか) 東北大学電気通信研究所長・教授、 同大学国際高等研究教育機構長、同 大学総長補佐



半導体レーザ励起エルビウム添加光ファイバ増幅器を 世界で初めて実現した。これにより、高性能広帯域の超 多重光通信の中継が可能になり、長距離海底ケーブルを 含むグローバルな光通信網が実用化され、情報通信イン ターネットの発展に大きく貢献した。



日本学士院賞

「哺乳動物における卵子形成の制御 機構に関する研究」

佐藤 英明(さとう えいめい) 東北大学大学院農学研究科教授

哺乳動物の卵胞発育に係る3つの 制御因子を発見し、特に血管網増殖

誘起と卵胞発育が密接に関わることを明らかにした。ま た卵子成熟抑制因子を発見・分離し、卵成熟誘起の分子 メカニズムを世界に先駆けて解明した。



VEGF (vascular endothelial growth factor) 遺伝子ベクターの構築とその投与による卵 胞血管網の増殖と卵胞発育促進

eCG

TAP発現プロモーター VEGF TAP発現ターミネータ

VEGF遺伝子ベクター投与

(左はラット、右はブタ)

対照区

TAP: transcriptionally active PCR VEGF: vascular endothelial growth factor, 血管内皮細胞成長因子 eCG: equine chorionic gonadotropin, 馬绒毛性性輸列激化ルモン

VEGF+ eCG

血管内皮種製成長因子(VECP) 遺伝子を使って、卵胞内で一時的に発現可能なベクターを調製して、ラカトとブタ専集 に直接は入したところ、ブタで自然排卵の終ら倍、ラカトで約15倍の排卵直前卵酸を発現させることに成功した。この方 法は家畜の人為の卵胞質育促進やセイル卵板の資子を金の倍級に5用丁酸だっち

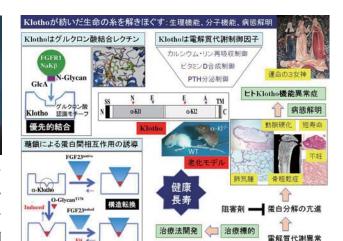
日本学士院賞

「Klotho family の発見とその分子 機能の解析を基盤とした生体恒常性 維持機構の研究」

鍋島 陽一(なべしま よういち) 先端医療振興財団先端医療センター 長、京都大学名誉教授



クロトー遺伝子の発見とその機能解析により、カルシ ウム恒常性維持機構の全体像、胆汁酸・コレステロール 代謝の新たな制御機構を解明、更に糖鎖の新たな機能を 発見し、糖鎖科学の発展、老化疾患の予防・治療法の開 発に道を開いた。



日本学士院賞

「2型糖尿病・メタボリックシンド ロームの分子基盤に関する研究」 門脇 孝 (かどわき たかし) 東京大学大学院医学系研究科教授、 同大学医学部附属病院長

脂肪細胞から出るホルモン、ア

ディポネクチンの抗糖尿病作用とその作用を伝えるア ディポネクチン受容体を発見し、肥満に伴うアディポネ クチン作用低下が2型糖尿病・メタボリックシンドロー ムの発症において主要な分子基盤であることを解明し た。



肩書きは授賞発表時(平成25年3月12日) 授賞理由等の詳細はホームページをご覧ください。 (http://www.japan-acad.go.jp/)

講演会レポート

平成24年10月以降、本院主催により、2つの講演 会を開催しました。

1 第57回公開講演会

開催日 平成24年10月27日 場 所 日本学士院会館

藤田昌久会員が「都市の発展と文化-江戸・東京をめ ぐって-」、内田祥哉会員が「日本建築の保存と活用」 と題して講演を行いました。 聴講者は187名でした。

藤田会員は、都市における文化の多様性や創造の問題などを分かりやすい例を挙げて説明し、多様な地域を育成するために廃央創域を呼びかけました。

また、内田会員は、木造建築で培われた日本における 建築の考え方を説明した後、上野公園にある歴史的建造 物を例に挙げ、その維持と保全について説明しました。

参加者からは、「例示の展開がわかりやすく、テーマを良く理解することができた」、「江戸時代から明治維新、第2次世界大戦を経て現在の日本に至る過程がよくわかった」、「よく利用し親しんでいる施設についての懇切な解説で、興味深く、有意義だった。」など、多くの感想が寄せられました。



藤田昌久会員



内田祥哉会員

2 日本学士院学びのススメシリーズ講演会「ナノサイエンスとナノテクノロジー - カーボンナノチューブの発見からその産業応用-」

開催日 平成24年12月8日 場 所 日本学士院会館

本講演会は、将来を担う中高生に、学問への憧憬を抱かせることを目的として計画され、今回は第5回開催となります。

講師の飯島澄男会員は、中高生を含む70名の出席者に、自身が発見した炭素材料であるカーボンナノチューブの構造や性質について、日本伝統の花かごやサッカーボールなどを用いてわかりやすく説明しました。

講演の後は、カーボンナノチューブのモデルなどを手に取り飯島会員と直接話をする時間が設けられ、飯島会員に熱心に質問する学生の姿も見られました。

平成25年後半には、第6回講演会を開催予定です。 詳細が決まり次第、本院ホームページにてお知らせいた します。



飯島澄男会員



聴講者に説明する飯島会員

第9回日本学士院学術奨励賞

平成25年1月15日開催の第1065回総会において、第9回日本学士院学術奨励賞の受賞者6名を決定しまし た。2月4日には秋篠宮妃殿下ご臨席のもと、日本学術振興会賞と同時に授賞式が挙行されました。



「機能的画像法を用いた脳回路システ ムの作動原理の解明」

池谷 裕二 (いけがや ゆうじ) 東京大学大学院薬学系研究科准教授

個々の神経細胞、シナプス等によ り形成される複雑な回路系を理解す

るために、大脳皮質や海馬に於いて活動するニューロン にカルシウムが流入する様子を光学的に捉えて解析を 行った。こうした手法による回路の解析は、新しい分野 を開くと期待される。



「高品質酸化物絶縁体界面での 金属伝導」

大友 明 (おおとも あきら) 東京工業大学大学院理工学研究科教授

ありふれたセラミックス材料から高 純度の単結晶を育成し、クリーンな界

面を形成することで優れた電子材料を得られることを示 し、酸化物エレクトロニクスの基礎を確立した。



「パリ王立科学アカデミーを申心とし た18世紀フランスの科学技術史的、 社会史的研究」

隠岐 さや香 (おき さやか)

広島大学大学院総合科学研究科准教授

科学の専門職業化の過程を18世紀

フランスのパリ王立科学アカデミーを対象として資料の 丹念な分析を行い、社会史の視点から王権に庇護される 小集団であったアカデミーが専門家組織に成長する経緯 を辿り、また思想史の観点から当時議論された諸科学の 「有用件」の概念を歴史的に明らかにした。



「先端的グラフ理論を利用した離散数 学、計算機学にわたる横断的研究」

河原林 健一(かわらばやし けんいち) 情報・システム研究機構国立情報学研 究所情報学プリンシプル研究系教授、 同研究所ビッグデータ数理国際研究セ ンター長

離散数学分野の最深淵かつ最難解とされる「グラフマ イナー理論」を発展させ、特に離散数学における最難関 予想である Hadwiger 予想(4色問題の一般化)に画期 的成果を挙げた。さらに、高速アルゴリズム設計の分野 で、グラフマイナー理論の導入により画期的高速プログ ラムの開発に成功した。



「難分解性環境汚染物質の分解細菌が 有する分解能の分子基盤の解明」

野尻 秀昭 (のじり ひであき) 東京大学生物生産工学研究センター 教授

難分解物質を除去するバイオレメ ディエション技術を確立するため、基礎的な遺伝子の発 現研究から応用的な現地適応研究に至る幅広い分野にお いて優れた業績を挙げている。



「産業組織の理論的分析」 松島 法明 (まつしま のりあき)

大阪大学社会経済研究所教授

産業組織論の理論研究において、数 学的モデルを用いた理論分析を中心に 行い、優れた業績を上げた。また、寡 占の一当事者として経済全体の厚生を

念頭におく公企業の存在を導入し、私企業の企業数や産 業構造に関して従来の研究にはない新しい知見を得てい る。

肩書きは授賞発表時(平成25年1月15日) 授賞理由等の詳細はホームページをご覧ください。

(http://www.japan-acad.go.jp/)

<学術奨励賞受賞者寄稿>

「キラりと光る研究」

東京大学・大学院薬学系研究科 池谷 裕二

「百聞は一見にしかず」という言葉があるように、視覚 情報の説得力は抜群です。だから私は、神経活動を従来 のように電気生理学的に計測するだけでなく、この目で 直接「見たい」と光生理学なる学問を提唱してきました。

その夢が叶った日。対物レンズの向こうにキラキラと 瞬く神経活動が浮かび上がったときの興奮は今でも覚え ています。真っ暗な視野に多数の神経が黄緑色の蛍光シ グナルとして点滅しているのです。

その瞬間、私の思考は遙か昔へとタイムスリップしま した。山奥の田舎街に向かうときのこと。私はうっかり 間違ったバス停で降りてしまいました。周囲には誰もい ません。最終バスなのです。私は歩くことにしました。 携帯電話もない時代、案の定、道に迷い、途方にくれます。 雨まで降り始めました。

街灯などありません。月も雲中で、完全に真っ暗です。 雨傘を深くかぶり、一人心細く歩き続けます。そのとき、 ふと、風景が明るくなった気がしました。

目をあげると辺り一面、そう、見渡す限りゲンジホタ ルの群れ。こっちで浮いたかと思えば、あっちではター ン。清澄なサウンドさえ聴こえてきそうな閃光の乱舞。

ヒトは闇に浮かぶ光に安堵を覚えます。古来、光は火 のある証拠。仲間がいる安心感につながるのでしょう。 あの日の原体験が、暗闇に神経活動が放つ仄かな光を求 める駆動力になっています。

ホタルに囲まれた夜、遠くに目を凝らすと民家が見え ました。インターホンに応じ、訝しげに扉を開いた住人 は、ズブ濡れの私を見ると、すぐに態度を和らげ、軽ト ラックで目的地まで送ってくれました。

私は大量の神経から一斉に活動を記録することによっ て、脳回路の動作原理に関して未解明だった多くの謎を 解き明かすことができました。それが今回の受賞理由で す。しかし、この大規模な実験とデータ解析は、私の一 人の能力ではとても無理なものでした。私の周囲には、 あのときの軽トラックの主人に似た、温かい仲間たちが います。そんな仲間に支えられての受賞です。この恩に 報いるためにも、今後は一層高いレベルで、文字通り、 光り輝き人々を魅了する研究を展開してゆくことを宣言 します。

日本学士院学術奨励賞・日本学術振興会賞授賞式(平成25年2月4日)



賞状及び賞牌を授与される受賞者



秋篠宮妃殿下と記念撮影



選考経過を報告する新開陽一選考委員会委員長



記念茶会で受賞者とお話しされる秋篠宮妃殿下

外国アカデミー等との交流

表敬訪問	訪問者	所属先等
平成 24 年 10 月 29 日	Sir Adam Roberts	英国学士院長、オックスフォード大学教授
平成 25 年 1 月 28 日	Dominique Barthélemy	フランス学士院碑文・美文アカデミー国内連携会員、
		ソルボンヌ大学教授
平成 25 年 1 月 29 日	Sung-Won Hwang 他	韓国国立郡山大学教授
平成 25 年 3 月 15 日	Keith Hipel	ウォータールー大学教授、カナダ王立協会科学アカデミー次期会長
平成 25 年 3 月 18 日	Suzanne Cory	オーストラリア科学アカデミー会長、
		ウォルター・イライザホール医学研究所教授
	Jerry M. Adams	ウォルター・イライザホール医学研究所教授
平成 25 年 3 月 18 日	Damyan N. Damyanov	ブルガリア科学アカデミー副院長
	他 アカデミー代表団	



英国学士院長との懇談

本院と昭和47年に交流協定を締結した英国学士院よ り、院長アダム・ロバーツ卿が来訪された。本院ではア ダム卿を囲み、久保正彰院長のほか英国学士院に関わり のある三谷太一郎会員、佐々木毅会員が同席して、日英 の学術情報の交換を行った。



平成24年11月26日、国際生物学賞委員会((独) 日本学術振興会に設置、委員長 杉村 隆幹事) 主催に よる授賞式が本院を会場として挙行されました。

この賞は、昭和天皇の御在位60年と長年にわたる生 物学の御研究を記念するとともに、本賞の発展に寄与さ れている今上天皇の長年にわたる魚類分類学(ハゼ類) の御研究を併せて記念し、生物学の奨励を図るものです。

今回の受賞者は、米国カリフォルニア工科大学・生物 学科教授のジョセフ・アルトマン博士です。

授賞式は、天皇皇后両陛下の御臨席を賜り、落ち着い た雰囲気の中で行われ、芝博一官房副長官(内閣総理大 臣代理)、田中眞紀子文部科学大臣からそれぞれ祝辞が



ブルガリア科学アカデミー代表団の訪問

会議出席のため来日したブルガリア科学アカデミー代 表団は、在日ブルガリア大使館ゲオルギ・ヴァシレフ大 使及び書記官とともに来訪され、本院の4役員との間で 両国アカデミーの組織や事業等について情報を交換し、 今後の協力を約した。ブルガリア科学アカデミーとは、 昭和55年に交流協定を締結している。

述べられました。引き続き両陛下ご臨席のもと、受賞者 を囲んで地階食堂で記念茶会が催されました。



客員スザンヌ・コリー博士を招へい

客員コリー博士夫妻の表敬及び講演会

スザンヌ・コリー博士は、オーストラリア南部のメル ボルンから、同じ分野の研究者である夫君アダムス博士 とともに来日し、3月18日に本院を訪問されました。 当日は、久保院長より客員メダルの贈呈が行われ、同席 した役員や医学分野の会員等と懇談を行いました。滞在 中には、旧知の研究者と研究ディスカッションを行った ほか、東京大学、大阪大学並びに京都大学で次のタイト ルで講演を行いました。

コリー博士の講演

The Bcl-2 family: an Achilles' heel for cancer? アダムス博士の講演

How the Bcl-2 protein family regulates the cell death switch.

両博士の講演について、東京大学訪問にあたりお世話 をされた渡部徹郎先生にレポートをいただきました。



大阪大学微生物病研究所での講演会





コリー博士(左)、アダムス博士(右)(いずれも大阪大 学提供)

講演を聴いて

東京大学大学院医学研究科准教授 渡部徹郎 アポトーシスとはプログラムされた細胞死である。私 たちの体内では、異常を起こして癌化する可能性がある 細胞のほとんどは、アポトーシスによって取り除かれ続 けており、これにより、ほとんどの腫瘍の成長は未然に 防がれている。Bcl-2 はアポトーシス抑制活性を持つた め、正常細胞に過剰に発現させると細胞は癌化するが、 Bcl-2 が癌遺伝子であることを発見したのはコリー博士 のグループである。さらに両博士は Bcl-2 と構造が類似 した Bax がアポトーシスを促進することを見出したが、 アダムス博士の講演は構造解析を用いた Bax がアポトー シスを促進するメカニズムの解明についての最新の知見 についてであった。さらに、コリー博士には癌にとっ ての「アキレスのかかと」であるアポトーシスを活性化 する化合物の発見、さらにその化合物を用いた自血病治 療の試みの最前線について講演して頂いた。Bcl-2ファ ミリー研究はご夫妻にとってライフワークの一つである が、癌遺伝子としての発見から癌治療という未来につな がる可能性までの歴史を感じさせる講演であった。



講演後の質疑応答(京都大学提供)



講演を前に本庶佑会員(右端)とともに(京都大学提供)

新会員選定

平成24年12月12日開催の第1064回総会において、日本学士院法第3条に基づき、次の4名を新たに日本 学士院会員として選定しました。



苧阪 直行 (おさか なおゆき) 第1部第1分科

専門分野:認知心理学・認知科学

現職:京都大学名誉教授

ワーキングメモリを含む行動指標 と脳イメージングの関係から意識の

三層モデルを提案した。意識と注意という経験的に取り 扱い難い対象を「ワーキングメモリ」の枠内で、行動的 指標と認知脳科学的手法を駆使して、認知科学的に解明 するアプローチを示したものとして高く評価される。



佐藤 幸治 (さとう こうじ) 第1部第2分科 専門分野:憲法学

現職:京都大学名誉教授

司法権と基本的人権の問題分野を 軸として憲法理論を展開した。民主

主義と司法審査制の間の原理的緊張をふまえた上での司 法制度と政治制度の統合的な理解、人格的自律の概念に 即した幸福追求権解釈に基づく包括的基本権理論などの 問題提起は学界に新鮮な刺激を与えている。

<会員はこうして選ばれます>

1月~2月 学士院会員、日本学術会議会員、学会・

大学等学術機関からの会員推薦受付

3月 会員選考開始

4月~11月 第1部・第2部の各部で選考

12月 新会員選定

ホームページでは、より詳細な選考理由を 紹介しています。

(http://www.japan-acad.go.jp/)



竹内 啓 (たけうち けい) 第1部第3分科

専門分野:統計学・計量経済学

現職:東京大学名誉教授、 明治学院大学名誉教授

統計学の数理理論の基礎である統

計的高次漸近理論を確立し、最尤推定値の最適性に関し て独自の基準を示した。これは時系列解析や計量経済分 析などの分野でひろく応用されている。その他、数理統 計学に関し、統計的推測理論、実験計画法、分布近似論 などの分野で多くの論文を発表している。



西村 和雄 (にしむら かずお)

第1部第3分科

専門分野:複雑系経済学・経済変動

理論

現職:京都大学名誉教授、

京都大学経済研究所特任教授、 同志社大学経済学部客員教授

複雑系経済学の世界的第一人者として、景気循環や経 済変動の研究で先駆的な業績を挙げてきた。独自の数理 的手法を用いて、合理的な経済主体の活動の結果として 景気循環を説明した研究は、内生的景気循環理論を現代 経済学の枠組みの中で構築したものとして、非常に高く 評価されている。



会員選定状授与式の様子 (平成24年12月19日)

学士院の歩み 第4回 授賞制度の創設

日本学士院は、明治 6 (1873) 年に結成された近 代的啓蒙学術団体である明六社を源流として明治 12 (1879) 年に創設された東京学士会院を前身とします。 東京学士会院は、明治 3 9 (1906) 年に帝国学士院に 改組し、昭和 3 1 年に現在の日本学士院となりました。

このコーナーでは、130年を超える本院の歴史についてシリーズで紹介します。第4回は「授賞制度の創設」です。

明治39(1906)年に成立した帝国学士院の目的は、「帝国学士院ハ文部大臣ノ管理ニ属シ学術ノ発展ヲ図リ教化ヲ裨補スルヲ以テ目的トス」(規程第1条)であり、前身の東京学士会院の目的がほぼ踏襲されている。依然として文部大臣の諮問機関的な性格は失っていなかったが、学術研究面に重点が移され、その規模は格段に拡充された。

大きな変更としては、40名の定員を60名に増員したうえで、学士院を第1部(文学及社会的諸学科)と第2部(理学及其の応用諸学科)の2部に分け、それぞれの部の定員を30名として会員はその専攻分野によってどちらかに属することにしたことである。

また、帝国学士院にふさわしい新事業として、研究の 発表及び紹介、紀要の出版、研究調査事業などを発議し、 漸次実現している。なかでも大きな事業が国立アカデ ミーとしての授賞であった。

明治43(1910)年7月5日、明治天皇から宮内省 を通じて賞典資下賜の御沙汰があった。宮内庁書陵部に 残る「恩賜録」には次のように記されている。



藤澤利喜太郎会員『諸外国学士院ノ組織及授賞制』 明治 43(1910)年、藤澤会員は、外国学士院の諸制度 を調べ本書を刊行し、関係会員の参考に供した。

「其院ノ目的ヲ遂行スル為メ、普ク学術ノ研究ヲ奨励スル旨趣ヲ以テ、授賞ノ制ヲ定メントスル計画 す之候趣被聞食、特に賞典資として、本年より十箇年間、年々金弐千円下賜候事」。

翌7月6日には、授賞にあたって次の3項の規定を設けることが発表され、7月7日の新聞各紙でも報じられている。

- 一、帝国学士院ハ其ノ会員又ハ会員ニアラサル者ヨリ提 出シタル著書、論文、報告等ニシテ学術ノ発達又ハ教 化ノ裨補ニ著シキ効果アリト認ムルモノニ賞典ヲ授与 ス
- 二、授賞スへキ著書ハ刊行ノ初二当リ帝国学士院二提出 シタルモノニ限リ、論文、報告等ハ帝国学士院紀事又 ハ「メモアル」二登載シタルモノニ限ル
- 三、賞典授与ノ式ハ毎年一回之ヲ行フ

学士院は、さっそく加藤弘之前院長を委員長とする授賞規則起草委員会を設け、賞の名称や制式、授賞の対象などの審議を行った。授賞規則は原案を岡野敬二郎委員が作成し、同年10月12日の総会で可決された後、同月26日、文部大臣の認可を受けた。そして翌明治44(1911)年4月12日、恩賜賞が創設されることとなったのである。恩賜賞は「特定ノ論文著書其ノ他特種ノ研究ニシテ其ノ成績卓絶ナルモノニ対シテ」授賞するものであり、賞牌(会員の坪井正五郎が提案した菊花の御紋章に長鳴鳥を配した直径2寸5分〔約7.6 cm〕の円形のもの)と賞金からなっている。

明治44(1911)年7月5日午前10時より、第1回恩賜賞の授賞式が上野公園の東京美術学校(現東京芸術大学美術学部)構内の帝国学士院で執り行われた。



「恩賜録」に収められた賞典資の御沙汰書の文案 (宮内庁書陵部所蔵)

(会員寄稿)

「加藤正治博士頌徳館」に寄せて

竹下 守夫 会員 (第1部第2分科)

昨年11月、長野県東筑摩郡生坂村に「加藤正治博士 領徳館」が開館した。同村の教育委員会が、地元出身で 日本の法学界に大きな足跡を残された加藤正治先生の遺 徳を讃えるとともに、過疎化が進み沈滞しがちな同村に あって、将来を担う子供達に郷土の偉大な先人の業績を 展示して勇気を与えようとの趣旨により設立したものと 聞く。我が国で、法律学者の記念館としては、米沢市の「我 妻栄記念館」が有名だが、他に余り例を聞かない。私は、 たまたま妻が加藤先生の孫の一人という縁から招待を受 けて開館式に列席してきた。生坂村は、安曇野の北、J R篠ノ井線明科駅から国道19号線を犀川沿いに10キ 口ほど北上したところにある。

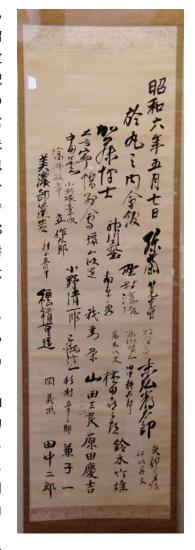
加藤先生は、明治4年3月10日の生まれ、本姓は平林といわれた。旧制第一高等学校を経て、東京帝国大学法科大学に入学。明治30年7月に同大学を卒業後、加藤正義氏の養嗣子となり、加藤姓となられた。明治32年、破産法研究のためドイツ、フランスに留学。主としてベルリン及びキールで破産法学の研究に取り組まれた。同36年4月、帰国とともに東京帝国大学法科大学教授となられ、昭和6年3月、定年により退官。その後、昭和22年1月、枢密顧問官に任ぜられ、また同24年3月からは中央大学総長になられたが、その在職中、同27年3月16日、急性心臓麻痺により急逝、享年81歳であった。

この間、大正14年6月、帝国学士院会員に選定を受け、昭和10年5月から同23年6月まで帝国学士院・日本学士院幹事を務められた。同23年7月に日本学士院第一部長に選任され、逝去された同27年3月には、なおその地位にあられた。

加藤先生は、我が国に始めて近代的な破産法学を導入され、その学識を基礎に大正11年の旧破産法・和議法の制定に大きな貢献をされた。「破産法の大家」として広く知られている。「頌徳館」の展示物の主要な種類の一つは、そのような学者としての先生の生涯に関わるものである。明治34年3月にベルリンの写真館で、シルクハットを片手に持って撮られた写真、留学の折に使用された大きく頑丈な皮製のスーツケース、中央大学総長室での写真、珍しいものとしては、日本国憲法の施行に伴い枢密院が廃止された当時の枢密顧問官一同の集合写

真(と思われる)などがあ る。最も興味深いのは、昭 和6年に東京帝国大学を定 年退官された折、惜別の記 念として、当時の法学部の 教授、助教授の方々に、富 井政章、山田三良などの先 輩も加わって、それぞれ思 い思いに署名されたものを 掛け軸に表装された一幅で ある (写真参照)。美濃部 達吉、小野清一郎、田中耕 太郎、穂積重遠、末弘巌太 郎、南原繁、我妻栄など、 錚々たる方々の個性溢れる 署名が集められた逸品であ る。兼子一、田中二郎の名 前が末席に見える。

よく知られるとおり、加藤先生は、最晩年まで俳句を趣味とされた。俳人としての先生に関わる展示物も多い。先生は、故郷の犀川に因んで、俳号を「犀水」と称された。先生と俳句との関わりは、ベルリン留学



時代に美濃部達吉先生の紹介で、巌谷小波主宰の「自人会」に入会されたのに始まるといわれる。自筆の句集22冊(全冊展示)、2万8千余に及ぶ句の中で、先生が若い学生等の集会の際に好んで披露された一句がある。「歩々ゆるく遅きは克たむ富士詣」が、それである。倦まず弛まず着実に歩を進め、努力を積み重ねて、自分の立てた大きな目標に到達するという、先生ご自身の信条を現わすとともに、人生において遭遇する困難を乗り越え、自ら立てた目標を達成する道を、後進に示されたものとして味わい深い。「勝たむ」ではなく、「克たむ」であることに注目したい。

昭和7年東京都生まれ。昭和30年東京大学法学部卒業、法学博士(東京大学) 一橋大学法学部助教授・教授、一橋大学 法学部長を経て、平成11年駿河台大学

長、平成19年同総長(平成22年まで)。 一橋大学名誉教授

平成20年12月より日本学士院会員



『学問の山なみ』から 一歴史をつくった会員―

130年を超える学士院の歴史の中で、500名以上の会員が選ばれました。このコーナーでは、物故会員追悼の 辞を集めた『学問の山なみ』などから数名を選んで紹介します。

山川健次郎 やまかわ けんじろう

1854 (嘉永 7) 年-1931 (昭和6) 年 1901 (明治 34) 年 帝国学士院会員選定 (1906 (明治 39) 年 会員辞退)



大河ドラマ「八重の桜」の舞 台、幕末の福島(会津)に生ま れた山川健次郎は、15歳で白 虎隊士となるが、年少のため除 隊。戊辰戦争で会津若松城が落 城後、謹慎中に脱出し、越後の 奥平謙輔の書生となるという激 動の少年時代を送る。その後、

18歳の時に、選ばれて米国に留学。エール大学で3年 間物理学を学んだ後帰国して、東京開成学校(東京大学 の前身) 教授補となった。また、1879 (明治 12) 年 には日本人で初めて物理学の教授となり、1888(明治 21) 年には日本人初の理学博士となった。

山川は、東京大学では20年以上教鞭を取り光学、熱学、 音響学など物理学のほとんどの科目を担当して後進の研 究者を育て、日本の科学の近代化を果たす上で、大きな 役割を果たした。また、東京理科大学の前身である東京 物理学講習所(東京物理学校)の創設に協力した。

1901 (明治 34) 年には、第2代東京帝国大学総長に 就任するが、1905 (明治 38) 年に、日露戦争強硬派の 戸水教授の休職手続きに伴う混乱の責任を取り、総長を 辞職した。しかし、山川の辞職に反対する法学部教授ら が反対運動を起こし、文部大臣の辞職など社会的な問題 となった。

その後は明治専門学校(現在の九州工業大学)初代総 裁、九州帝国大学初代総長、二度目の東京帝国大学総長、 京都帝国大学総長(兼任)、私立武蔵高等学校校長、貴 族院議員など要職を歴任した。

田中舘愛橘 たなかだて あいきつ

1856 (安政 3) 年-1952 (昭和27) 年 1906 (明治 39) 年 帝国学士院会員選定



今の岩手県二戸市に生まれた 田中舘愛橘は、1878 (明治 11) 年東京大学理学部に入学し、山 川健次郎が最初に担当した学生 となった。また、メンデンホー ルやユーイングといったお雇い 外国人の薫陶を受けた。1882(明 治 15) 年に卒業すると準助教授

に就任。1888(明治21)年から2年間英国に留学し、ウィ リアム・トムソン(ケルビン卿)に師事した。のちにベ ルリン大学に転学、明治24年に帰国して以後は東京大 学に勤め、長岡半太郎、本多光太郎、木村栄、寺田寅彦 など多くの科学者を育てた。また在職25周年の祝賀会 に際し大学に辞職願を提出し、60歳定年制の先駆けと

田中舘が業績を挙げた分野は幅広く、物理学(とくに

地球物理学)、度量衡、航空学、ローマ字運動が挙げら れる。

地球物理学の分野では日本の地球磁力測量に力を入れ た。方位角の測定を容易かつ迅速に行うことができるよ うに独自の電磁方位計を考案し、日本全国の地球磁力測 量を実施した。また、1891 (明治24)年の濃尾大地震 の調査を行い、根尾谷の大断層を発見した。この調査を 契機として震災予防調査会が設立された。

ローマ字運動では、日本式と呼ばれる綴り方を考案し、 日本ローマ字会を組織して終生ローマ字による日本語表 記の普及に努めた。

特筆すべきは、22回に及ぶ外遊で、地球物理学、度 量衡、航空学など諸方面の国際会議に列席し、国際連盟 の知的協力委員も務めた。

田中舘は明治39年に会員に選定されてから昭和27 年まで、45年にわたり帝国学士院・日本学士院会員と して在籍し、第2部部長や貴族院帝国学士院会員議員を 務めるなど活躍した。昭和27年に亡くなった時にはそ の功績に対し史上初の学士院葬が行われた。

第58回公開講演会のお知らせ

平成25年5月25日(土)、第58回公開講演会を 信州大学松本キャンパス(長野県松本市)において開催 します。

塩川徹也会員は「パスカルの賭け ―意思決定におけ る理性と信一」、喜田 宏会員は「インフルエンザウイ ルスの生態 一鳥インフルエンザとパンデミックインフ ルエンザー」というタイトルでそれぞれ講演を行います。

《開催日時》

平成25年5月25日 午後1時~4時10分 《場 所》

信州大学 松本キャンパス 経済学部第1講義室 《共 催》

信州大学

《後 援》

信濃毎日新聞社

入場無料

必要事項を記入の上、下記まで事前にお申込ください。 定員200名、先着順。

<申込方法>

日本学士院ホームページから、または e-mail、FAX、 往復ハガキによる

<必要事項>

氏名(フリガナ)、住所、電話番号等連絡先

日本学士院公開講演会係

(〒110-0007 東京都台東区上野公園 7-32) TEL: 03-3822-2101 FAX: 03-3822-2105 E-mail: kouenkai@japan-acad.go.jp http://www.japan-acad.go.jp/

パスカルの賭け

―意思決定における理性と信―

塩川徹也

「人間は考える葦である」の名句で知られるパスカル は、天才的な数学者・物理学者であると同時に熱烈なキ リスト教徒でしたが、神の存在をめぐって賭けを設定す ることを通じて読者を信仰に誘うという奇想天外な議論 を、遺著『パンセ』のなかで展開しています。この議論 は多くの読者の心を捉えると同時に、大きな物議をかも してきました。神や信仰のような神聖な事柄を損得勘定 と結びつけるのは、いかにもはしたないと感じられるか らでしょう。

しかしながらパスカルは問題の文章で、自らの宗教的 信念のエッセンスを表明するとともに、人間の意思決定 と行動の動機・構造にきわめて鋭い分析を加えています。 わたしたちはどうして不確かな未来を目指して行動を起 こさずにはいられないのか、そこで働く意思決定のメカ ニズムはいかなるものか、そこで理性と信はいかなる役 割を果たしているのか、そして最後に、パスカルの目指 す信仰はいかなるものだったのか。こうした問題をパス カルの文章を読みながら、考えていきたいと思います。

インフルエンザウイルスの生態

一鳥インフルエンザとパンデミックインフルエンザー 喜田 宏

毎年冬に流行する季節性インフルエンザ、1918年、 1957年、1968年と2009年に出現して世界に流行し たパンデミックインフルエンザ、そしてアジアで大きな 被害を及ぼしている高病原性鳥インフルエンザは、すべ てインフルエンザ A ウイルスの感染によって起こる病気

「インフルエンザウイルスは、どこで、どのように存 続してきたのか、パンデミックインフルエンザウイルス と高病原性鳥インフルエンザウイルスは、どのようにし て出現するのか、また、ウイルスの病原性、変異、遺伝 子再集合とは何か。」これらの疑問に答え、如何に鳥イ ンフルエンザと季節性インフルエンザを克服し、パンデ ミックインフルエンザに備えるべきかについてお話しし ます。



会館施設の利用案内

建築家谷口吉郎氏の設計による現在の日本学士院会館 は、日本を代表する碩学の府にふさわしい荘厳かつ気品 と機能性を備えた建物となっています。館内には、議場 のほか大小6つの会議室等があります。

本施設をご利用になりたい方は、庶務係までお問い合 せください。

(平成24年10月以降の会館利用状況)

利用年月日	利用目的・内容
平成24年10月7日	第5回加藤山崎教育基金贈呈
	式
	第12回山﨑貞一賞贈呈式
	第28回国際生物学賞授賞式
平成25年 2月 4日	第9回日本学術振興会賞・日
	本学士院学術奨励賞授賞式
平成25年 3月 4日	第3回日本学術振興会育志賞
	授賞式

建築家 谷口吉郎

明治37 (1904) 年一昭和54 (1979) 年。石川 県金沢市出身の昭和期の建築家、庭園研究者である。東 京帝国大学建築学科卒業後、東京工業大学で講師、助教 授を経て、教授を務め、昭和48(1973)年には文化 勲章を受章している。

主な作品として、慶應義塾大学日吉寄宿舎、同大学第 3校舎(4号館)・大学学生ホール、同大学三田キャン パス第2研究室(新萬來舎)、秩父セメント第2工場、 帝国劇場(ロビー・客席)、出光美術館、東京国立博物 館東洋館、東京国立近代美術館、ホテルオークラ東京(メ インロビー)、日本学士院会館など数多く挙げられる。

投稿論文の募集

本院発行の欧文紀要 "Proceedings of the Japan Academy" は、明治 4 5 年の発刊から 1 0 0 年の歴史 を有し、自然科学の全分野をカバーした欧文誌です。 Series A (数学) と Series B (数学以外の自然科学分野) にわかれ、年間10号発行しています。

投稿論文は、学士院会員が中心になり外部を含む研究 者による速やかな審査を経て掲載を決定し、出版されま す。また、出版された論文は、無償でオンライン公開し ています。

論文は、学士院会員以外の国内外の研究者も投稿でき ます。一般の研究者からの論文投稿を広く募集していま す。

○投稿方法等は、本院ホームページをご覧ください。

Series A: http://www.japan-acad.go.jp/english/ PJAA/pjasera.htm

Series B: http://www.japan-acad.go.jp/english/ PJAB/pjaserb.htm

寄附のご案内

民間企業、団体、個人等から広く寄附金を受け入れ、 学術の振興に資する事業を実施しています。金額の多少 にかかわらず趣旨に賛同される方々からのお申し出をお 待ちしています。(寄附受入は予算計上後、翌年度とな ります。)

なお、本院への寄附金は国に対する寄附金として、寄 附者が個人の場合は、所得より「寄附金控除」の適用を 受け、法人の場合は「寄附金損金算入」の特例が適用さ れます (関係法令:所得税法第37条第3項第1号)。 詳細については、会計係までお問い合わせください。





学士院会館

会員・客員の逝去

平成24年10月以降、次の方々が逝去されました。 <会 員>

永井 博 会員 (第1分科)

平成24年11月7日 享年91歳

藤田 良雄 会員 (第4分科)

平成25年1月9日 享年104歳

<客 員>

Eric J. Hobsbawm 客員 (イギリス) 平成24年10月1日 享年95歳

会員の近刊紹介

- ・中川久定他校注『翻訳小説集 一』岩波書店、2013年
- ・東野治之校注『上宮聖徳法王帝説』岩波文庫、2013 年3月
- ・苧阪直行編『道徳の神経哲学―神経倫理からみた社会 意識の形成』新曜社、2012年11月
- ・小田滋『国際法の現場から』ミネルヴァ書房、2013
- ・河本一郎『株券の法理(商事法研究第2巻)』成文堂、 2013年2月
- ・塩野宏『行政法1・2 第五版補訂版』有斐閣、2013 年3月
- ・樋口陽一他編『危機の憲法学』弘文堂、2013年2月
- ・樋口陽一『五訂 憲法入門』勁草書房、2013年3月
- ・三谷太一郎『学問は現実にいかに関わるか』東京大学 出版会、2013年2月
- ・松尾浩也『刑事訴訟の理論』 有斐閣、2012年 10月
- ·松尾浩也他『実例刑事訴訟法 I~Ⅲ』2012年9月 ~ 11月
- ・菅野和夫他編『労働審判制度の利用者調査 実証分析 と提言』有斐閣、2013年3月
- ・菅野和夫『労働法 第10版』弘文堂、2012年12月
- ・佐々木毅『政治学講義 第2版』東京大学出版会、 2012年11月
- ・貝塚啓明他編『国際的マネーフローの研究』中央経済社、 2012年11月
- ・貝塚啓明他編『実学としてのパーソナルファイナンス』 中央経済社、2013年3月
- ・井村裕夫『進化医学人への進化が生んだ疾患』羊土社、 2012年12月
- ・井村裕夫全体編集『日本の未来を拓く医療 ―治療医 学から先制医療へ―』診断と治療社、2012年12月
- ・岸本忠三『免疫難病の克服をめざして』中山書店、 2012年11月
- ・本庶佑『ゲノムが語る生命像』講談社ブルーバックス、 2013年1月

編集後記

今回発行しました第11号のニュースレターでは、平 成25年度日本学士院賞受賞者の業績紹介や第9回学術 奨励賞に関する受賞者紹介及び寄稿のほか、講演会の様 子や新会員の選定等についてお伝えします。

ご寄稿いただきました先生方や会員の皆様には心より 御礼申し上げます。

さて、日本学士院会館は上野公園にありますが、最寄 りのJR上野駅から日本学士院に至るまでのビルの谷間 から東京スカイツリーを見ることができます。(会館屋 上からも見えます。)

東京スカイツリーに関連して、昨年12月に「眺める なら東京タワー、上るなら東京スカイツリー」という記 事を目にしました。東京23区の賃貸住宅に住む20~ 40歳代の男女 600 人を対象にした不動産情報会社のア ンケート調査で「部屋から見えるなら…(どちらを選び ますか?)」という問いの結果(東京タワー48%、東京 スカイツリー 25%) に関する記事です。

私事ですが、私のこれまでの東京での勤務先は、いず れも東京タワーが見える所でしたので、この問いには東 京タワーと答えたと思います。東京タワーは高さでは東 京スカイツリーに負けていますが、タワーのデザインや 夜のライトアップなど、依然人気が高いということなの ではないでしょうか。

一方、「展望台に登るなら…」という質問の結果は、 東京スカイツリーが 59%で東京タワーの 20%を大き く上回ったそうです。東京スカイツリーは開業から1年 経っていませんので当然の結果と考えられますが、私も 上野から眺めているだけでなく、できるだけ早く東京ス カイツリーを見学したいと思っているところです。

最後に、日本学士院では5月25日(土)の午後、信州 大学松本キャンパスで公開講演会を開催する予定です。 奮ってご参加ください。

(H)

◎お問合せ先

日本学士院

〒 110-0007 東京都台東区上野公園 7-32

電話:(03)3822-2101 FAX: (03)3822-2105

E-mail: jimu@japan-acad.go.jp

第11号:発行日:平成25年4月15日 (年2回 4月、10月発行)

ホームページもご覧ください。 http://www.japan-acad.go.jp/